
神を携えた観察者

オズワルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神を携えた観察者

【Nコード】

N2463V

【作者名】

オズワルト

【あらすじ】

俺は広大な宇宙を監視し、間違いを更正する、「観察者」。今日もお仕事。明日もお仕事。戦争をする奴等、かたっぱしから更正していく。あ、やばい。俺の身体が吹っ飛ばされた。でもまあ、よくあるよくある。

つかさ、こんな行為、意味あるのかな。

頭の変な短編です。

(前書き)

二つ目の短編ストーリー
変なものができたなあ、と思います。

俺の名前はベンジャミン。ベンジャミン・バトン。え？ 何処かの小説の主人公みたいだって？ 気にしないでくれよ。たった今、決めたばかりなんだから。

まあ、君らが俺の言葉を聞いているってのは、相当おかしな事だと思う。なぜなら俺は、これは君らが暮らしている、五千万年後の世界にいるから。それを可能にしている理由は、企業秘密ってやつで。俺の切り札だから、他人に漏らすわけにはいかない。

まあ、聞いてくれよ。ベンジャミン・バトンの悩みをさ。

それでは順を追って説明しよう。

俺は「ウォッチャー観察者」って仕事をしている。世界の争いを無くすと言う、すばらしいお仕事だ。俺が生み出されたのはたしか君らの時代からだいたい千百七十万年後だから、かれこれもう、三千万と大分はこの仕事をしている。

俺のお仕事　　言い方代えれば使命　　は、宇宙の津々浦々にわたり全人類を観察し、道を踏み外しそうならばその道を正す、だ。すごいだろ？　崇高で滅茶苦茶にカッコいい職業だと思わないか？

まあ、俺は思わないけどね。

今からちょっと前、君らからすれば四千年後か。人類による環境破壊はもう、限界以上になっちまったんだ。地球温暖化（アレはバカが騒ぎ立てるだけのホラだった）とか酸性雨とかオゾン層破壊とか、人類はなんとかやりくりして生き延びてただけで、それでも、環境破壊は止まらなかった。

地球に住めなくなったという、そこは対して問題じゃない。その頃にはもう、人類は宇宙進出を果たしていたからね。

でもなんていうのかな、地球が使い物にならなくなったせいで、踏ん切りがついちゃったんだ。それまではなんだかんだで太陽系から外に暮らす人間ってのはよほどの物好きばかりだったんだ。けど、地球がどうしようもなくなって、その頃から大量の人間が太陽系から飛び出した。天の川とかアンドロメダ星雲とか、すっげー遠くまで行くやつもいた。

人類は太陽系でさえ巨大すぎるのに、それよりも広大な宇宙に散らばっていった。そして、独自の生活を始めたんだ。それはもう、やばいぜ。まともな星にたどり告げずに原始人に近いような生活を送るやつらもいれば、資源の豊富な星にたどり着いて、地球よりもさらに高度な文明まで築き上げちゃうやつらもいた。宇宙希望で格差ができたんだ。

その結果、どうなったか。

高度な文明、発達した科学力を持ったやつらは、近隣の星を征服し始めたんだ。

人間ってのは、つくづくバカだ。星ひとつで我慢しとけよ。それ以上いらないだろ。呆れるしかないよな。けど、俺を創ったオッサンたちはそうは思わなかったんだ。「人は道を踏み外したのならま

た正せばいい。そのためには『観察者』が必要だ」ってね。

その「観察者」ってのが俺ってわけ。侵略戦争を仕掛けるバカを説得して、平和的な宇宙を築く為に尽力してんの。かれこれもう…ええと、どれくらいだったっけ。忘れた。どうでもいいや。

そんでね、今もそのお仕事申してわけ。

「だからさあ、止めた方がいいって。世の中、ラブ・アンド・ピース、だぜ？」

俺はいつもそういうんだけど、相手はいつも納得してくれない。たまに笑って握手を求めるやつもいるけど、そういうヤツは大概、何かを企んでる。

ここは惑星…名前わすれた。M78星雲のどこかだった。その星の上。

大分豊かな星だ。緑があって、水があって、海があって、太陽がある。まるで、君らの住んでいる地球のよう。高度な文明、つまり強大な科学力を持っている。武力は相当なものだ。周囲に、こいつらに敵う人類はいないだろう。もちろん、人間以外だって。

「黙れ。くたばり底ないの無能監視者め。貴様らの言う事なんて、知ったことか」

蔽ついパワードスーツを着たそいつが言うんだ。しかも、目の前のこのスーツ、その気になれば小さな衛星くらいなら　そうだな、君らにわかるように言うなら、月くらいなら　簡単に破壊できちゃう代物だ。そりゃまあ、強気にもなるよね。

「無能監視者ねえ。確かにそうだ。お前ら人間はどんなに俺が平和を説いても、一向に学習しない。でもさ、これ、お仕事なんだよ。」

俺らは君たち人間に仲良くしてもらわなきゃいけないの。大事なラブ。そしてピース。愛と平和だよ。侵略戦争なんかしたって、そんなの手に入らないぜ」

「お前、おちよくってんのか？」

「そんな、滅相もない。俺は平和的な解決を望んでいるだけだよ。その証拠にホラ、武器なんてどこにも持ってないだろ？」

俺は丸腰。全身全霊の誠意。なのに、人間はいつも僕の話聞いてくれないんだよね。どんなに説得しても、戦争をする。どんなに身体を張って止めようとしても、最後は必ず戦う。マジふざけてるよ。こっちの身にもなれっての。

「そうだな。お前は無防備でアホ面下げて、突っ立っている」

「おいおい、ベンジャミン・バトンに『アホ面下げて』、なんて言うって許されると思ってるのかい？ 彼は頑張って生きたんだよ。老人の身体で産まれて、徐々に退行していく数奇で悲しい人生を、せいっぱいに生きたんだ。そんな彼をバカにするなんて、さすがの愛と平和をかざす俺でも許せないね」

「……何言ってたデメエ」

あ、マズイ。今の一言で、完全にこいつ、キレちゃった。ふざけて悪かったよ。心の中で土下座するからさ。

パワードスーツを着た男が指を鳴らす。俺の周囲に同型のパワードスーツを着た男達がやってきた。その数、二十。その合計火力は、星を消しとばす気があってくらいだ。

「ウォッチャー監視者」だが何だかしらねえが、俺たちに指図すんじゃないよ。俺たちは世界最強の力を持つてるんだ。テメエ一人、消すのなんてわけはねえ」

男が俺の頭にでつかい銃口を突きつけた。はは、よしてくれよ。こんなの撃たれたら、俺の身体は消し飛ぶじゃないか。俺はこいつが撃たないって信じているけどね。

「話せばわかる。戦争なんて、意味ないだろ。こんな文明もってるんだから、我慢してくれよ。宇宙の平和の為にさ。だから、君もこんな物騒なもの引っ込めて」

「死ね」

あ、俺の身体が消し飛んだ。ビームで焼かれた。

なあ、信じられるかい？ こいつ、撃ちやがったよ。俺の身体、一瞬で蒸発させやがった。俺は信じていたのに。人間でも話せばわかるって。ちくしょう、ふざけやがって。

もういい。俺はキレた。つつか、話し合いができないならば、こつろつて言われてる。

「こんな事、したくはなかったけどなあ」

俺は身体を再構築した。何でそんな事できるのかって？ 俺が「監視者」だからだよ。

俺の本体　つまりメインデータは我らが母の星、地球のサーバーにある。次元を捻じ曲げてデータを送り、ここ、M78星雲まで通信している。質量を送り込み、存在している。

俺は人間じゃない。ただのデータだ。まあ、わかっていると思う

けどね。だって、三千万年と大分を生きるのなんて、人間だったらできないし。

「な、て、テメエ!？」

「俺は何度も言ったよ。平和的に解決したいって。ああ、悲しい。ラブとピースのない世の中には修正が必要だ。狂った舞台を救済しなくちゃならない。俺はこんなことしたくなかった。君らが悪いんだ。いつまでも戦争を止めない、君らが」

男たちは再び僕の身体を消し飛ばした。

そんな事意味ないんだけどね。

片腕だけを再構築させた。そしてその手を振り上げる。何故って、やっぱりロボを呼び出すときは、カツコつけなきゃだろ。腕だけなのは、他を再構築するのが面倒だからだ。

「だから出番だ。出で来い。いや、違うな」

ここはやっぱり、雄雄しい声で。指を鳴らし、カツコよく。機体名は違うけど、まあいいや。

「出るオオオオオオオオオ!ガンダアアアアアアアム!」

空間を切り裂いて、そいつがやってくる。サイズは、そうだな、君らにもわかるようにいうなら、エヴァンゲリオンくらいかな。デザインはデモンベインとガオガイガーを足して二で割った感じ。カラーリングは純白。決してガンダムではないよ。

関係ないけど、俺は日本と言う国のサブカルチャーが大好きだ。

たまに地球のサーバーでドラゴンボールとかスラムダンクとか読めるよ。ゼーガペインとかゾイドとかも面白いよね。ガンダムもテ

レビ放送OVA映画スペシャルエディションBD全部観たぜ。最近
はまっているのはトライガンかな。リアルタイムで体験している君
らが羨ましいよ。

そんなことはどうでもいい。

君らも知っているだろ。舞台がどうしようもなくなった時、颯爽
と現れ全てを解決していくその仕掛け。どんな悲劇も一瞬で救済し
てしまう、究極に最高に理不尽な仕掛け。俺たち『監視者』ウォッチャーを創つ
たオツサンたちは、「それでも戦争を止められなかった時の仕掛け」
として、こいつを俺たちに託した。なんでも解決してしまう、デウス機械
仕掛けの神を。・エクス・マキナ

正確には『デウス・エクス・マーキナー』だな。地球のデータベ
ースの中の、ウィキペディアの項目に書いてあった。「超展開」と
も呼ぶらしい。

俺は「機械仕掛けの神」の中のコックピットに身体を出現させる。
そんなことする必要はない。こいつは俺の意志と直結しているから。
なら、なぜそうするか。

なぜなら、その方がカッコいいから!!

「降参しなよ。愛と平和を誓うなら、命だけは助けてやるっ」

「この野郎、バカにしやがって!!」

男たちが全力でビームを撃ってくる。バカだよ、こいつら。そん
なことしたら、この星もただじゃすまないってのに。

機械仕掛けの神が空間に裂け目をつくる。ビームを適当な空間に
飛ばす。これで安心。誰も被害を受けない場所に、ビームは飛んで

いった。

「な、え、おい、ハア!？」

そんなに驚くなよ。世界最強だったらさ。まあ、神様に敵うわけがないけどな。

こいつはいろんなことができる。例えば銀河を真つ二つに切り裂いたり、例えば宇宙の端から端へ飛んでいたり、例えば時間を超越したり。

全てを改変する、それが機械仕掛けの神。ウィキペディアにならうなら、デウス・エクス・マーキナー。

「さあ、唱えろ。ラブアード、ピースだ!」

これが言いたかった。

「う、あ、あ……」

こいつらビビってる。ビビり過ぎだろ。つーか、さっきの威勢はどこに……

なんかを機械仕掛けの神が踏んでいた。あ、これ、こいつらの仲間じゃん。三人くらい、うっかり踏んでたわ。しかもさっきくつた空間の裂け目に巻き込まれて、五人くらい死んでたわ。

でもこれ、不可抗力。事故。故意じゃないから、業務上過失致死くらいかな。まあ、俺の長年やってきた事に比べれば、ちよつとのミス位、許される。

「俺ってばドジっ子だなあ。それはさておきだ。早く言っんだ。ラブ。そしてピースを!」

俺はこんなフレンドリーに接しているっていうのに、こいつらは俺の言う事を全然聞いちゃくれなんだ。全く、どこまでも捻くれて反社会的なやつらなんだろうな。多分、自分たちより強いやつらに出会った事ないから、あっさりヘタレたんだ。

「ああ、君らと分かり合えなくて悲しいよ。やっぱりニュータイプかイノベーターでもないとわかりあうなんて無理なんだろうなあ」

俺は、等しくどのガンダムでも好きだ。種も種死もな。

「じゃ、そういうことだから」

というわけなので、俺は機械仕掛けの神で空間を歪曲させ、M7
8星雲のその星をこの世から捻じ切った。

とまあ、長すぎる前フリになっちまった。

要するに俺が言いたいの、三千万年以上も色んな星を更正させようとしたのに、最後はどの星も戦争っていう道を選んだってことだ。消し飛ばしたあいつらのようにね。

俺は永遠に行き続ける。この仕事は永久に終わらない。

そのくせ、人間はいつまで経っても変わらない。

俺のこの行為、意味があると思うかい？

最初はちゃんと話し合いをしてたんだ。いや、今回もちよつとはしてたけど。なんというか、わざわざその星のえらいさんの所言っ

て、説得しようとして、駄目だった。成功したかと思った時も、100年後には何かと理由をつけて戦争をしゃがった。

俺は死んでいるも同じだ。データのくせに、そんな事を思う。

無限の命。終わらない堂々巡り。俺はもう少ししたら次の星を止めに行く。駄目だったら破壊する。一々更正させるの。面倒くさくなっちゃったし。

データの俺でも、生きていたいんだ。戦争しているやつらは、みんなイキイキしている。一方的な征服を楽しんでいる。俺は全く楽しいと思わないけど。

うらやましい。

こんな俺はいないのと同じだ。存在価値がどこにもない。どうせ、100年経てば人間は忘れる。どんなに誠心誠意を伝えても、時がたてば世代が変われば、俺の言葉は記憶から完全に消えていく。

無意味なんだ。

俺は生きている実感が欲しい。データのくせに、と君は言うだろうか。でもさ、君だったらどう思う。何もかもが無意味なんだ。何も残らないんだ。楽しくも何とも無い。永遠にその作業の繰り返し。快楽に満ちた生を送る人間もいるのに、俺は永遠の退屈を死んだように繰り返す。

サブカルチャー、確かに楽しいけどさ。でも、話し相手、いないんだよね。俺は『監視者』^{ウォッチャー}の中でも特別で、自我を持っている。他のヤツらにはそんなものない。

ベンジャミン・バトンが羨ましい。

誰とも違うその数奇な人生のなかで、誰かと心を通わせた。そして、彼には終わりがあった。

俺もそうしたい。けれど、できない。ああ、無意味だ。全てが無意味だ。生きる実感が欲しい。俺は生きたい。真の意味で生を体感したい。

教えてくれ。どうすればいい。どうすれば俺は生きる意味を知ることができるんだ。

誰かと心を通わせる？ できない。たった100年経てば死ぬやつら、俺の話を聞かない奴等、俺の言葉を見捨てる奴等、駄目だ。不可能だろ。

諦めるな？ 三千万年続けて、わかったんだ。俺はわかるうとした。けど、あいつらが決定的に拒絶するんだ。

だった終われ？ 無理だ。俺のその自我だけは、プログラムが拒絶する。あのクソジジイどもは、俺に永遠を縛り付けたんだ。

生きたい。生きたい。生きたい。生きたい。これじゃ駄目だ。俺は死んでる。死んでる。死んでる。無意味だ。価値がない。ただの浪費だ。生きなきゃ、生きなきゃ、生きなきゃ、生きなきゃ、生きなきゃ、ああ

生きたい、生きたい、存在したい、生きていたい、意味が欲しい、死んだままは嫌だ、無意味は嫌だ、このまま永遠は嫌だ、生きる価値が欲しい、生きたい、生きる、でもどうすれば、ああ、どうすれば、生きてないのか、死んだままなのか、価値がないままなのか、生きることは許されないのか、俺は生きれないのか、存在できないのか、本当の意味で生きれないのか、死なのか、俺は死んだままなのか、生きる、駄目だ、できない、それでも、ああア、ア、ア、ア、

(後書き)

ベンジャミン・バトンは気分だったので入れました。

感想、評価、あったらお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2463v/>

神を携えた観察者

2011年10月8日15時00分発行